
迷者セイムス

翠木まこ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

迷者セイムス

【Nコード】

N0043W

【作者名】

翠木まこ

【あらすじ】

人とは違う容姿を持って生まれた子は総じてこう呼ばれる、>妖精返りくと。妖精とは、かつて神に成り代わって人を支配した種族で、悪の象徴だった。だが、天界から遣わされた獣が妖精を喰らいつくし、今では国の守護聖獣として崇められている。不運にもエメラルド色の変わった瞳を持つアズフィーリーは、孤児院育ちを強いられた。女らしさにやや欠けてはいたが、心根の優しい少女へと成長をとげた。晴天の霹靂は十五を迎えた年。なぜだか貴族に引き取られ、お嬢様と呼ばれる暮らしが始まった。養女話の裏には、

義兄の伯父セイムスとその恋人フロリアに関する事情が隠れていた。悲恋の果てに死したセイムスは、未だ魂となって過去の時間に捕らわれたままだった。それを、救えるのは>妖精返り<のアズフィリ
ーだけだった。

序章

(貴族の考えることって本っ当、わかんない)

アズフィリーは大きな音を立てながら、義兄の部屋へ向かっていった。

大人が十人並んでもまだ余裕のある、広い廊下だ。突き当たりの窓など豆粒ほど小さい。

廊下だというのに絨毯が敷かれており、壁際には長椅子が点々と設けられている。

部屋と呼んでも差し支えない豪華さに驚くより呆れた。それに、貴族って軟弱者だ。

(椅子なんか置いておくくらいなら、こんな長い廊下作らなきゃいいのに)

アズフィリーは代わり映えのしない景色に飽きて、視線を窓へやっった。

鏡のように磨き上げられた窓ガラスは、不機嫌そうなアズフィリーをありのまま映す。

十五歳になったアズフィリーの容姿は、未だ幼さが色濃く残っている。

ふっくらしすぎる頬に、低い鼻と小ぶりな唇。顔のパーツの中で唯一自信を持てる大きな瞳は、よりもよって 妖精返り の象徴であるエメラルド色。せめてもの救いは髪がありふれた小麦色だったことだろう。わがママをいえば真っ直ぐな髪質が良かった。なんせ人目に付くほどの癖っ毛だ。髪をまとめるのも苦労する。今日は一本の三つ編みにした。

着ている服は、数ある中から一番まともで、動きやすいもの。白いブラウスの上に縦縞模様のエプロンドレスだ。腰に大きなリボンがあつて恥ずかしい。靴は編上げのブーツ。

「可愛くないわ」

アズフィリーは自分を睨みつけてから、歩きを再開させた。ここ最近笑った記憶がないな、と思った。ほとんど口を尖らせている。

原因は三か月前に遡る。それまでは生まれ育った孤児院で平凡な生活をしていた。いたずら好きな子供を叱りつけてばかりいたが、ずっと怒ってるわけじゃなかった。

失って初めて、いかに幸せな暮らしだったかを思い知らされた。

突如、貴族の養女として引き取られたアズフィリーを、仲間達は拍手喝采の大喜びだったが本人は違う。現実味を持たないまま今日まで過ごしてきた。

このお城みたいなお屋敷と、古ぼけた孤児院での暮らしを比べたら後者に勝てる見込みなんてないだろう。だが、絶対的に勝ることは、自分の居場所の有無だ。

「おはようございます、アズお嬢様」

「お、おはよう」

すれ違う侍女に深々と頭を下げられる度に、これは夢だと言い聞かす。

「アズお嬢様、先程からヴァーン様がお待ちかねですよ」

一呼吸してから入ろうと思ったのに、衛兵のお兄さんがさっさと開けてくれた。

「待ってたよ、私の可愛い妹、アズ」

足を踏み外しそうになつたが、何とか堪える。

歩いてきた廊下が部屋のごとき豪華さならば、この部屋は聖堂のような清廉さがあつた。なぜか部屋に柱が立っているし、たった四段ばかりの階段まである。上がった先には暖炉を前に、革張りの椅子が向かい合っている。傾斜した天井の一部は、ガラス張りになつていて、朝の日射しが燦々と降り注ぐ。

その陽光の中にいるのは、太陽の化身と言っても差し支えない常識外れの美形。黄金を丹念に溶かし込み、髪に塗りつけたようだ。

ゆるく波打つ前髪を耳へ流し、後ろの髪は首筋の辺りで清潔に切りそろえられている。均整の取れたしなやかな体躯も完璧ならば、もちろん顔の造形も半端ない。高い鼻梁は嫌みなほど美しく、愛嬌のあるくるみ形の瞳は黄金がはめ込まれているよう。口角の上がつた唇は常に笑みが絶えない。

兄と呼ばなくてはならない男。カルディナ家の次期当主シューヴァーン・カルディナだ。

「アズ、今日はとても大切な話があるんだ」

シューヴァーンはふらつと机の端に手を乗せ、眉間へ中指を添えた。

芝居がかった仕草を胡散臭そうに眺め「はあ」、と気のない相槌を打つ。

「今日から寝間着はズボンにして欲しいんだ」

適当に聞き流そうと思っていたので反応が遅れた。

「私が毎晩風邪をひかないように毛布をかけているけれど、やはり女の子が足を冷やすのは心配だからね。ずっと気掛かりだったんだよ。それに」

悩ましげに頭を振って、溜息一つ。

「あれでは目に毒だ」

「誰のよ！ ていうか、来ないでよっ」

「ふふ。ようやく私の顔を見たね、アズ」

楽しげに肩を揺らすシューヴァーンは、完全に面白がっている。

悔しいったらない。

「こっちへおいで」

シューヴァーンは壁面に描かれた世界地図の前に立った。しぶしぶ傍へ行くと、大きなバスケットが三つも並んでいるのを見つけた。旅支度だろうか。

「今、アズがいるのはここね」

シューヴァーンは人差し指を地図の上に当てた。示す場所は王都から東へずれた位置だ。そこからスツと最北端へ指が滑っていく。

「そして、アズにはここへ向かってもらう」

口をぽかんと開けたまま見ていたアズフィリーは、しばし黙考した。

「どうして？」

当然の問いに、シューヴァーンは柔らかな微笑を送ってきた。

「告白しよう」

黄金の瞳がわずかに細くなった。あまりに綺麗で、迫力のある眼光だ。

「アズがずっと気になっていた、なぜ養女にしたのかってことをね」
アズフィリーは身体を強張らせた。

何度訊ねても、冗談ばかり言っつて片付けられたが今日こそは聞ける。これで胸のつかえが取れるというもの。身にまとう全てのものが不相応で、居心地が悪い日々だったのだ。

「実は、やって欲しいことがあるんだよ。アズ、君にしか出来ないことだ」

「それって、あたしが 妖精返り だからってことよね？」

でなければ、引き取るなど考えられない。まさか、瞳でもくり抜かれるのだろうか。

「そうだね」

あっさり肯定したことに、胸が軋んだ。それは自分でも意外な反応だった。

「でもそれだけじゃないから。特別なんだアズは。世界に唯一の宝石さ」

「そ、そういうなんか、霧がかかったみたいな、もやんとした言い方止めてよ」

「ふふ、まあいいや。さあ、真面目な話をしようか」

シューヴァーンはアズフィリーの足元に片膝を付き、下から覗き込んできた。

「あ、あたしはいつも真面目よ。そっちがふざけてばかりいるんだわ」

「ごめんごめん。でもね、私だってたまには真剣になるんだよ。ごくたまに」

(あ、認めた。しかも強調してるし)

故意に遊ばれていることが完全に証明された所で。

「これから行く場所に、私の伯父がいる。私に似てかなりいい男だけど、間違つては駄目だよ？ あくまで似てるだけで、私ではないから」

真剣に聞く価値が果たしてあるのか。一気に脱力感を覚えたが、耐えよう。

「その人は過去に大切な人を亡くしてしまい、ずっと立ち直れずにいるんだ。もう十五年もの歳月が流れてしまっている。どうにかして助けてあげたいんだ。そう思うだろう？」

「う、うん。思うけど、でも、それがあたしとどう関係が」

「そうかい！ そうだろう？ やっぱりアズは心の優しい子だな」
両腕をがしつと掴まれて揺すられた。

「な、なんか話がいまいち見えてこないんだけど」

「あっちに行ったら何かと混乱すると思うけど、とりあえず相手に話を合わせて過ごしてね。困ったときは寝てしまおう」

「何それ。すでにちんぷんかんぷんなんだけど」

「アズ、無事解決できたらご褒美をあげるから考えておきな」

「え、願い事を叶えてくれるってこと？」

食いつきの良いアズフリーに、シューヴァーンは何度も頷く。

「じゃあ例えば、孤児院に帰りたいて言ったら帰れるの？」

シューヴァーンの笑顔が凍りついたことに、アズフリーはまるで気付かない。

「つまりは、セイムスさんって人を助けるためにあたしを引き取ったのよね。変てこりんな話だけど。なら初めからそう言えばいいのに。お金くれたら協力したわよ？」

あっけらかんと言いつ切る十五歳の少女に、仮にも兄であるシューヴァーンは泣きそうな顔で「ひどい」と非難した。

一章

シューヴァーアの伯父がいるという屋敷へは半月かけてたつた今、着いた。

馬車から出ると北の風に身を竦まされ、正面の屋敷を見て心を凍らされた。

屋敷は鉄柵にぐるりと囲まれ、雑草で一杯になった庭を挟んで建っている。二階建ての大きな建物だけれど、所々壁に穴が空いているし崩れかかってもいた。元々白かったであろう壁はうっそうと這う蔓によって闇色のよう。

「え、えつと、本当にここ？ おじさん場所間違えてるんじゃないか」
唯一の旅仲間であつたおじさんは荷物を下ろし終えると、御者席へ戻り、鞭打った。

「え！ おじさん、あたしを置いていくの？ こんな人気のない場所に」

見渡しても屋敷はここ一軒だけで、どう見ても深い森の中としか思えない。

「ヴァーン様には何か尊いお考えあつてのことです。信じております、お嬢様。お元気で」

啞然と、見送つていたアズフリーはややしてから覚悟を決めた。
「ええい、行けばいいんでしょ、行けば」

バスケットを持ち、壊れかけた鉄柵の門から堂々と入っていく。背の低いアズフリーは胸まで届く雑草に溺れながら進んだ。石か根っこか分からないが何度かつまづき、時には転び、泥だらけになつたが無事、玄関までたどり着いた。

再度、屋敷を観察するとその有様にますます不安を覚えた。部屋の中まで窺えないが、窓ガラスが砕けまくっているのをたやすく想

像できる。砂埃が我が物顔で荒らしているに違いない。こんな廃墟に人が暮らしているのか。

アズフィリーはごくりと唾を飲み込み、わずかに開いている玄関の戸に手を掛けた。反発するような重低音が鳴った。怖かったのでまず、片目でチラツと見た。それから両目をパツチリ開け、最後に袖で目元をこすった。それでもおかしいので今度は頬をつねる。

「ど、どうなってるのコレ」

アズフィリーの眼前には信じがたい光景が広がっていた。簡潔に言ってしまうえば、外観との隔たりに驚いているのだ。

入ってすぐの大広間には、中央の階段を挟んで両端に大きな暖炉がついていた。どちらにも火は灯っているので部屋は春のように暖かい。聖堂にあるような長細い窓が二階にずらっと並び、手摺りに囲まれた回廊も見えた。点々と配置された燭台にも火が灯っている。どこも朽ちてなどいない。それどころか隅々まで掃除の行き届いた心地よい生活空間だ。

何度瞬きを繰り返しても瞳に映る景色に変化はない。

アズフィリーはぎこちなく後ろを振り返る。いつそ外の景色も変わっていれば夢だと思えるのに、違った。溺れそうなほど草が元氣よく伸びている。勘が、外へ戻れと告げた。

「フロリア！」

再び草むらへ戻りかけたとき、誰かに手を引っ張られ大きく身体が傾いた。頭から床にぶつかると思ったが、痛みはない。真上に男の顔が逆さまにあった。

「あー！」

この一声には二つの意味があった。一つにはここに居るはずのない男の顔だったから。二つに、後ろから抱きすくめられていたから。「あああ」

言葉にならないのは驚きすぎて顎が軽く外れかかっているからだ。その顎を、男はよりにもよって手にとり、アズフィリーの顔をきくと上げてきた。

「どういつつもりだい？ 外に出ては駄目だとあれほど言ったのに」「んなつ！ は、はな、離してよっ」

力を振り絞って男の腕から逃れ、閉じられた玄関の扉に背中を預けた。

「どど、どどなってるの？ なんでここにあなたがいるのよ」

「フロリア、どうしたんだい？ 何を言ってるのか分からないよ」

（ふるりあ？ 誰のことよ。まさかあたしじゃないわよね）

けれど男が見つめる先にはアズファイリーしかない。

男は肩を竦め、気遣うような視線を投げてきた。ふざけている様子もなし。

「おかしな事を言っつて。僕に叱られるのを避けるためにわざとかい？」

アズファイリーは心を落ち着かせ今一度、広い視野をもって男を眺めた。

容貌はあの男、シューヴァーンにしか見えない。別人だとは到底思えないほどにうり二つ。だが、背はシューヴァーンより高いし、髪も胸元まで垂れて長い。

「ええと、シューヴァーンじゃ、ない？」

「どうしてここで甥の名前が出てくるんだい」

（甥？ この人一体何歳？ シューヴァーンと同じ、二十代くらいに見えるけど）

「フロリア、まさか僕の名前忘れてないよね？ まるで記憶喪失みたいな話しっぷりだよ」

アズファイリーは視線を泳がせる。ようやく出発前に言われた意味深な会話を思い出す。

「セ、セймスさん」

「外れ」

（うそ！ 外した？）

「さんはいららないね」

アズファイリーはがっくりと肩を落とす、その場に座り込んだ。

シューヴァーンと顔がそっくりなだけあって、中身もどことなく似ている。

確か、このセイムスさんを過去のしがらみから助け出すのがお仕事だ。フロリアというのが、亡くなってしまった大切な女性なのだろう。完全にアズファイリーをフロリアだと思い込んで接してきているのを見れば、これはかなりの重症だ。

アズファイリーは名前を呼ばれた気がして、重たい瞼を押し上げた。

私にそっくりな美青年には会えた？

自惚れたことをサラっと言ってしまえる男、それは。

シューヴァーン！

ふふ、呼び捨ても良いけれど、語尾に付け足すものがあるね。すっかり目が覚めたアズファイリーは、隣に立っているシューヴァーンに突っ込むより先に、ここが何処なのか気になった。

どこもかしこも、空のように真っ青な部屋だった。部屋、と呼んでいいのか怪しい。窓や壁、天井もみえないし、途方もなく広かった。空の中を浮かんでいるような心地だった。下から綿毛のような白い光が、上へ向かってゆらゆら飛んでいる。

アズの夢の中だね。

夢？ え、じゃあ、あたしの夢にあなたが登場しちゃってるわけね。最悪だわ！

所でその寝間着、似合っているね。やはり私の見立てに狂いはない。

満足そうに頷いて、熱い視線を飛ばしてくる。

アズファイリーは自分の夢だというのに、居たたまれなさを感じた。バスケットの中に入っていた寝間着は、相変わらずふわふわひらひらとレースをあしらったもの。くるぶしまで届くゆったりとした

作りで、キュロットとセットに入っていた。

まあ、確かに着心地いいけど。

良かった。作った側としては最高の褒め言葉だよ。あ、その顔は信じていないね？

きょとんと目を丸めるアズフィリーをシューヴァーンは取り残していく。

疑うのなら、裏地を見てごらん。その寝間着は裾をめくればあるよ。

何があるのか。恐ろしかったが、言われたとおり裾をめくると、金糸で文字が刺繍されているのを見つけた。

ああ、アズは字が読めないだったね。私の名前を字にすると、そうなるんだよ。

へえ……は？ はあ？ どうしてあなたの名前が刺繍されているのよ。

私が見つけた、しるし。

つまり、シューヴァーンは本当に服が作れてしまうのか。信じがたい事実に関心を失う。

雑談はこの辺りにしようか。アズ、しばらくは伯父上に付き合っただけでいいね。私も出来る限り早く、その場所へ向かうから。君の存在が道しるべだよ。

散々からかってから、真摯な態度で締めくくる。その癖をどうにかして欲しい。

一体どちらが本当のあなたなの？

陽の光を瞼の裏に感じ、アズフィリーは目を覚ました。

眼を擦りながら、窓へ寄ると一気にカーテンを引き開けた。それから部屋を見渡す。

さして広くない、と言ってしまうのはカルディナ家で過ごした

せいで、感覚が麻痺しているから。天蓋付きの寝台に、毛足の長い絨毯が敷かれた床は十分贅沢だ。

ぼーっとしたまま暖炉の前まで行くと、大きな丸い鏡が壁にかかっていた。考え込む自分の姿を認めしたが、かすかに違和感を覚える。小走りに鏡に向かい、食い入るように見る。

「だ、誰？」

アズフィリーが眉尻を上げると、鏡の中の少女も同じように眉を動かした。手を鏡に添えても、頬をひっぱっても、叩いても、鏡の中の少女が違う動作をすることはなかった。

「あたし、顔が変わっちゃったの？」

そう、鏡の中には見知らぬ少女が映っていた。

「す、すごい美人だわ。おとき話に出てくるお姫様みたい」

肌は、雪のように儂い白さ。頬は、花が咲いたようにほのかに色づき、唇もふつくらとして愛らしい。瞳は目を瞪るほど大きくて、吸い込まれてしまいそう。アズフィリーとはまるで似てないが、共通する箇所が一つあった。それは瞳の色だ。気味悪がられてきたが、鏡の中の少女を見ると、誇っていいように思えてくる。

髪まで見事にエメラルド色に染まっていた。ここでまさか、と後ろに隠れていた髪を、肩口から胸の前へ流した。指の間をサラサラと滑る感触は、憧れていたまっすぐな髪質だ。

アズフィリーは髪をつまんだまま、その場に尻餅をついた。その時、扉が開く。

「おはよう。どうしたの？ そんな所に座り込んでちゃって」

朝食を携えた、シューヴァーンだった。その顔を見てなぜかホッとした。卓上に盆を置くと、こちらへ歩いてきたので、絶るように見上げた。

「ね、ねえ、あたし、おかしいの。ほら、髪の色も変わったし。顔だっですごい美人よ」

必死なアズフィリーの頭を、シューヴァーンは撫でてきた。

「どうしたんだい、フロリア？ いつも通りじゃないか。昨日から

ちょっとおかしいね」

そう呼ばれ、アズフィリーは昨日の出来事を瞬く間に思い出す。

「どこか調子が悪いの？」

アズフィリーは大口を開けたまま、頭を振った。

(この人はセイムスさんだったわ)

「フロリア？ 本当に具合が悪いなら隠さないで」

セイムスはアズフィリーの手を取り、やんわりと包み込んできた。思わず逃げ腰になる。

「ま、待って。昨日はすっかり言えなかったけど、あたしフロリアさんじゃないわ」

完全に思い込んでしまっているセイムスには悪いが、人違いしたままではそれこそ酷だ。

「君がフロリアでないはず、ないじゃないか。どうしてそんなおかしいことを言うんだい？」

悲痛な声を出されてしまい、アズフィリーは自分がひどい暴言を吐いた気がした。

何も言えず黙っていると、セイムスの顔が急接近してきた。思わず臉を下ろすと、額に柔らかな感触が当たった。何をされたのか分からないまま、今度は抱きしめられた。

「フロリア、大丈夫だから。僕がずっと傍にいるから心配しないで」アズフィリーの耳朶に当る熱い吐息と祈りのような言葉。安心させようと紡ぐ声は、どちらかというときセイムス自身に言い聞かせているように思えた。

「う、ごめんなさい」

勝手に口から滑っていた。

「あたし、ちょっと混乱してて。だから、変なこと言っちゃうみたい、なの」

さらに、言い訳までしていた。

「いいんだ。無理もない」

セイムスは一際強く抱きしめてから身体を離し、視線を絡ませて

きた。

「君をヴァルハヌスになどやらない」

決然と言った。

「僕ら妖精が愚かだったんだ。こんな世界、神々に返せばいい。返してしまえばいいんだ」

次第に怒気をはらませていく声に、アズフィーリーは胸を抉られるようだった。

「泣かないで」

セймスの指摘で、アズフィーリーは目から涙が零れていることに初めて気付く。

自分の感情ではない、涙ではない、と直感的に思った。慌てて拭おうとしたが、それより早くセймスの手が伸びてきた。ふき取っても間に合わない程、涙は溢れた。

「大丈夫だから、もしものときは考えがあるから」

と、聞き取れぬほどの囁きが続いた。アズフィーリーは喉元にナイフを突きつけられた心地に陥る。視界の端にちらつくエメラルドの髪は、自分の存在を曖昧にしていく。

二章

味気ない朝食を済ませてから、セイムスの進めもあつて再び寝台に転がっていた。が、どうにも落ち着かず、外の景色を眺めようと窓辺へ立つ。

「はあ。ここは一体何なの？ あたしどうなっちゃってるのよ」

二階の窓から見える庭は、昨日外から見たまんまの草むらだ。違うのはこの屋敷内だけ。外と中とで世界が違うとしか思えない。顔も変わったのもここへ入ったからだろう。漠然とした恐怖がアズフイリーの肩にのしかかる。

分からないことだらけなのに、セイムスの言動に心が過敏に動く。あんなに泣いたのは久しぶりだった。心は一つのはずなのに、別れて歩いているみたい。

「そういえば、ヴァルハヌスにやらないって、どういう意味かしら」腕を組んで部屋の中を歩き始めた。

ヴァルハヌスといえば、国の守護聖獣だ。寝物語に聞かされた神話によれば、聖獣は天界の獣で、妖精を狩るために地上に遣わされた救世主。遙か昔、人々を恐怖で支配していた妖精は、天界へ通じる空を穢し、神々が二度と地上に干渉できないようにしてしまった。けれど追放された神々は人を救うため、空に裂け目を入れて聖獣を送り込んだ。結果、妖精のいなくなった平和な世が現代まで連綿と続いて来た、という話だ。

セイムスの指すヴァルハヌスは憎悪の対象に聞こえたが、本来は崇めるべき存在だ。

「あーもう考えてもしょうがないわ」

着替えるために寝台へ引き返し、寝間着のボタンを途中まで外すとそのままひっくり返して下着姿になった。寝間着を寝台に放り、

床に開けたままのバスケットから適当に服を引つ掴む。丸い襟のブラウスを袖に通し、胸元を賑わせるレースを邪魔だと思いながらボタンをはめた。次にスカートをはこうと足を入れたときだった。裏地にキラリと光るものを見つけた。注意深く見ると、ウエストの部分に見覚えのある刺繍があった。文字のようだったが、あいにく読めない。なのに、どうして見覚えがあると思ったのか。どれ、と記憶を遡ると、思い当たる節にぶつかった。

アズフィリーは火が点いたように、裏返ったままの寝間着を手に取る。裾の辺りに視線を這わせると、今度はバスケットへ飛びつく。整然とたたまれた服をどんどん取り出し、全て裏返していった。とりつかれたような作業の後、心ここにあらずといった様子で一言。

「し、信じられない」

アズフィリーは今朝の夢を思い出し、現実との繋がりを疑った。

ただの不愉快な夢だと片付けられない気がする。

「ていうか、気持ち悪いわ。あの人やつば変態よ、変態だわ」

言葉とは裏腹に、アズフィリーの口元は緩んでいた。笑いが込み上げてきたが、鼻の奥がつんと痺れもした。服をかき抱くと、確信することができた。

（あたしは、あたしだ）

確かシューヴァーンはここへ来るようなことを言っていたか。あれがただの夢でないのなら、きつと本当に来るはず。不覚にもアズフィリーは心強さを覚え、すっかり気を取り直していた。途中だった着替えも済ませ、腕まくりをしながら部屋を後にした。

じっとしているのは性分じゃないので、とにかく屋敷の中を探ってみよう。

意気込んだものの、地道に一つ一つの部屋を回っていくしかなかった。どの部屋も綺麗に片付けられていて、ゴミ一つない。働き者

の侍女に感心したが、誰にも会わないことに思い至る。ひよつとして、この屋敷にはセイムスとアズフィリーしかないのだろうか。

「フロリア、何してるの？」

出来れば避けたかったセイムスとばったり会ってしまった。

「まさか体調が悪いのに、今日も掃除かい？　綺麗好きにも程があるね」

「か、身体を、動かしていた方が楽なの。いいでしょ？」

アズフィリーは腕まくりをした手を見せつけて主張した。

「仕方がないね。フロリアがそういうのなら逆らえないよ」

「ありがとう」

「そうだ、いつも言うけれどその書齋は片付けなくていいからね」「わ、分かってるわ」

調子を合わせると、セイムスは満足そうに微笑んで横を通り過ぎで行った。アズフィリーはホッと息を吐き、フロリアとして対応した方が平和に過ごせると学習した。

今しがたセイムスが出てきた部屋へ足を向け、一応辺りを確認してから入った。開けると埃っぽさが鼻についた。しかし、それよりも本の量に面くらった。

「す、すごい。これ全部読んだのかな」

そんなわけないだろうと、アズフィリーの常識は告げる。が、ほとんどの書棚は空っぽで、床には横積みになった本がいくつもの塔をつくっていた。歩けるスペースはわずかだ。足元に注意しないとあわや惨事になる。と、思った矢先にあっさりつまづく。しがみついて崩壊を阻止し、先へ進むと文机が現れた。机の上もひどい有様だ。

紙の配置を動かせば、触ったとバレてしまうだろうか。万一を考えて慎重に取るが。

「何が書いてあるのかさっぱり分からないわ」

半ばやる気を喪失しかけたが、紐でくくられた分厚い紙束に目があった。ぱらぱらとめくってみると、印字された文字ではなく、手

書きされた文字がびっしり記されていた。

「ひよつとして、あの人、本を書く仕事をしてるのかしら」

紙束は一束だけではなく、パツと見ただけでも十束はあると思えた。最後の頁までいくと、左手にかかる重みが増し、うっかり滑らせてしまった。床へ落とさなかつたが、咄嗟に掴んだ頁を破ってしまった。一時石像と化し、額の汗で我に返る。

「ど、どうしよう。さすがにこれは、不味いわよね。バレちゃうよ」

千切ってしまった紙切れは小さく折って、紙束の中に紛れ込ませた。今更遅いが丁寧に元の位置に戻す。その時、扉が開き、アズファイリーは咄嗟にしゃがみ込んだ。

「フロリア？」

セイムスの声と、踏み込んでくる足音に大いに焦った。汗ばむ手を握りしめて机の下まで這っていく。破裂しそうな心臓を、膝を抱えて精一杯隠した。

「何してるの？」

驚くほど間近で聞こえる声に顔を上げると、腰を屈めたセイムスとばつちり目が合った。

「髪、出てるよ。隠れるの下手だね」

床に流れ落ちた髪を掴み、口付けしながらそう言っ、微笑した。「出ておいで」

微動だりしないアズファイリーの手を取って、セイムスはやや強引に立たせた。

「どうしてここへ？ 何してたの？」

静かに訊ねられたが、余計身体が強張って声がでなかった。

「ここにあるの、読んだ？」

アズファイリーはわずかに首を振った。

「嘘」

弾けるように返ってきた声に、アズファイリーは必死に応える。

「見たけど、よく、分からなかったもの」

本当のことだったが、セイムスには通用しなかった。

「そんな言い方ずるいよ」

アズファイリーよりうんと大人の男が、泣きそうな顔をした。

「僕を心配してくれてるのは嬉しいけど、君は何も心配しなくていいんだよ」

ちつとも安心できない響きがあった。詳しいことが分からなくても、セイムスがフロリアの為に何か、危ないことをしようとしていると思えた。

「フロリア、これだけは覚えておいて。僕は君だけのためにやろうとしてるわけじゃない」

頭を抱えながらそう言うところを一旦止め、紙束に手を置いた。

「ひいては僕ら妖精のためだ。百年つどに繰り返される神封じの儀式を断ち切りたい。今回はヴァルハーツ家であるフロリアが贄に選ばれたが、次は僕の一族、カルディナ家だ」

セイムスは決然とアズファイリーへ顔を向け、訊ねてきた。

「フロリア、世界を救うためなら一人の犠牲は安いと思うかい？」

突然の難問に答えなど持つてはるはずもなく、考えたことさえない。

「世界一自分勝手な僕は、安いと思わない」

平然とそう言い切った後、セイムスは挑むように空を睨んだ。

アズファイリーは再び果てしなく青い場所にいた。ここは夢の世界だ。それも意味のある。

シューヴァーン！ いるんでしょ？ セイムスさんを助ける方法を教えてよ。

世界一自分勝手だと己を卑下したセイムスは、フロリアの為に一体何をしでかすのか。

ねえ、どうして伯父上にはさん付けして私は呼び捨てなのかなあ。

後ろから飛んできた声に、アズフィリーは慌てて振り向く。そこには、やはりシューヴァーンがいた。全身の力がすつと抜けるのが分かった。

話を反らさずきちんと教えて。何から聞けばいいのかも分からないくらいよ。

伯父上と、何かあった？

アズフィリーは訥々と、書斎でのやりとりを語った。話すうちに疑問に思ったことをぶつけ、最後の方は怒鳴り散らしていた。気付けば、シューヴァーンの服を掴むに至る。

お、落ち着いて、アズ。本当に申し訳なかった。ほら、半ば信じがたい話だろう？ 先に教えても鼻にもかけてもらえないと思っ
てさ。こうなつた方が頭が柔軟になるだろう。

へ、え！ なるほど、確かにそうね。お兄様って賢い！

は、初めてお兄様って呼んでくれたね。嬉しいよ！ 嬉しいのに、悲しいのはなぜ？

むすつと頬を膨らませているが、アズフィリーの心は晴れ渡り、スツキリしていた。

ふふ、まあいいよ。もう少ししたら私もそっちへ行けるから。

どうしてさつさと来られないの？ あなたが初めっから来てたら簡単なのに。

それが出来たら苦労はしないよ。アズがいる場所は、伯父上
が創った異空間なんだよ。招かれなければ入れないし、場所を特定するの
も困難だ。でも大丈夫。今はそこにアズがいるから、足跡を辿って
いける。だいたいは絞れたから、あとはこじ開けるだけだよ。
は？ な、何って？ 異空間？

うーん。そう、例えばここ、アズの夢の中も異空間だね。現実には存在しない場所。歩いて訪ねていっても、アズの夢の中には入れないだろう？

アズフィリーは渋面をつくりながら、頷いた。

でも、あなたは入ってくる。つまり、ええと、妖精だから、な

の？

信じがたいが、伯父であるセイムスが自分のことを妖精と言っていたのだから。

大正解。カルディナ家は妖精を祖にもつ一族なんだ。フロリア嬢もね。彼女はヴァルハーツ家だね。あとはラディツシユ王家もそう。それぞれ、何かしら特殊な能力を持っているんだ。それが、妖精。アズのように髪の色が人と変わっている子は、実は妖精に憑かれやすいつてだけなんだよね。本当に蔑まれるべきは、僕らなんだ。アズフィリーの驚きは想像を絶する。妖精は悪しき存在だ。聖獣に狩られていなくなつたはずなのに、今も人の世に君臨しているなんて信じられない。

つかれやすいつて、どういう意味？ 悪い、ことなの？

まさか、悪いことはないさ。憑かれやすいつていうのは、好意を持たれやすいつてことだよ。今回の場合、フロリア嬢の魂の断片が、アズの心に住み着いているんだよ。

アズフィリーは胸を押さえ、中にいるらしいフロリアのことを思った。

アズ、もし君が死んだ為に、君の大切な人が立ち直れずにいたらどうしたい？

果たして自分の死にそこまで悲しんでくれる人がいるのか気になつたが、いるとしたら。

助けたい。

存在する世界が違うから声も届かない。でも、手助けしてくれる人がいたら？

アズフィリーは拳をつくり、頷く。そして、見知らぬフロリアの死を心より悼んだ。

三章

それからアズファイリーはフロリアとして平和に過ごしていた。夢の中ではセイムスとフロリアの過去を教えてもらい、知るほどに辛くなった。

「一度休憩にしよう。お茶の用意をしてくるよ」

セイムスの声に、慌てて背筋を伸ばした。実はここ二日間ほど、絵のモデルというものをしていた。陽の当る窓辺で座り続けるといっても疲れるものだ。

部屋を出て行こうとしたセイムスだったが、扉を前にして急に座り込んだ。

慌てて駆け寄ると、セイムスは玉のような汗をかいていた。まなじりをキツと上げ、胸元を探り出す。シャツのボタンを外す手間すら惜しいのか、カマセに引きちぎった。すると、首に掛けたネックレスが現われた。紐でくくられた先には鍵の形をしたものがぶら下がっていた。それを掴み、床へ叩き付けた。刹那、視界が真っ白な光に包まれ、疾風が走った。アズファイリーは為す術無く、壁際まで吹き飛ばされ、俯せに倒れた。

「フロリア、すまない。怪我は？ どこか痛い所はあるかい？」

起き上がるのに手を貸してくれたセイムスに、両手を広げて大丈夫だと強調した。すると抱き寄せられてしまい、身体がカチンコチンになった。

「今のは何だったの？」

「誰かが、ここを無理矢理こじ開けようとしている。君を連れ戻すためだ。そうはさせない」

シューヴァーンだ。

アズファイリーはひどい裏切りをしているんじゃないかと、罪悪感

に打ちのめされた。今すぐ声を上げて謝りたい。こんなこと早く終わらせた。セイムスの肩越しに見える部屋はまさに嵐が去った有様だった。画布は、壁に叩きつけられたのか二つに割れていた。

伯父上は手強い。

夢の中で、シューヴァーンは開口一番にそう言った。アズフィリ―は大きな溜息を吐く。

その大層意味深な溜息にはどんな意味があるの？ とても気になるんだけど。

肖像画を惜しんでいると言ったら、シューヴァーンはどんな顔をするだろう。

別に。ちよつと、ビックリしたの。だって、いきなり壁に飛ばされたんだもん。

何だって？ まさか、怪我なんてしてないよね？ 嫁入り前なのに！

ガクツと膝が抜ける音が聞こえた気がする。

なんて冗談はさておき。アズ、伯父上のことを思つなら、中途半端な同情は捨ててくれ。このままがいいなんてことは、決してないのだから。

兄っぽい説教に、アズフィリーは口を噤んで悄然と頷く。

ねえ、ものすごく勇気を出して聞くんだけど。伯父上に恋しちゃってないよね？

え？

え！

先がアズフィリーで、後がシューヴァーンの声だ。

どうして、そんな可愛らしく頬が染まるの？ 許さないから！

は、はあ？ な、何よそれ。別にあなたに許してもらわなくてもいいし。

いいや！ そんな道理はない！ アズのお兄様だからね。

ば、馬鹿じゃないの！ 本当のお兄ちゃんでもないし、許しかいらぬもの。

そうか！ なら良い方法がある。私と結婚しよう。そしたら、文句ないね！

な、な

さすがに「な」しか言えなかった。が、ここで終わらせるアズフリーではない。

何アホなこと言っちゃってるの！ 文句しか出てこないわよ、馬鹿あ！

「嫌な夢でも見た？」

シューヴァーンに放っていただろ拳が、同じ顔のセイムスの手によって下げられた。まだ夜は明けていないようだ。蝋燭の灯りが寝台の辺りだけ届いている。

「昼間のことが気になってね。お姫様の眠りを守る騎士つてのをやるうと思ってる」

セイムスが言うつと軽薄に聞こえないのはなぜだろう。不思議だ。

「でも夢にフロリア姫の眠りを邪魔されるとはね。さすがに手が届かないや」

笑わせようとしてくれる？ とアズフリーは思った。

「さ、僕が近くにいますから。もう少し寝た方がいい」

セイムスは、アズフリーの目元をそっと手で覆った。優しくされる度に、複雑な気持ちは増していく。中途半端な同情なのか、それともこれが恋というやつなんだろうか。

例えば、恋に堕ちた瞬間っていうのは分かりやすいものなんだろうか。これは、恋です。こっちのは、同情です、と分類できたら簡単なのに。

フロリアはセイムスへの想いが、恋だと確信したのはどんな瞬間だったんだろう。

逆にセイムスは？ どうしても聞きたくなくなってしまった。

「ねえ、目が覚めちゃった。少し話していい？」

アズファイリーは寝たまま身体を横へ向けた。椅子に座っていたセイムスは、本を閉じることで了承だと示す。アズファイリーは毛布を顔半分まで覆った。

「えっとね、恋って、どんな瞬間に堕ちるもんだと思う？」

「うーん、優しくされたり、頼られたりしたとき、かなあ？」

間違っていないと思うが、あまり参考にならない。例えばだ、シユーヴァーンにはからかわれて楽しまれているだけだし。頼られているというより、利用されている。

「ちなみに僕は、失うと分かった瞬間だったかな」

おまけのように付け足す物だから、聞き逃しかけた。

「フロリアのことだよ」

セイムスは椅子から立ち上がり、寝台の橋へ腰掛けた。アズファイリーの手を握りしめる。

「たぶん、本当は出会った時だったのかもしれない。でも、すぐにそうとは思わないだろう？ 実際、僕は君のこと妹のように想っていたし」

アズファイリーは黙ったままゆっくり頷いた。

「けど、君が聖獣の贄になると、未来がないと知ったとき」
繋がる手が力強くなった。

「選ばれたのが僕だったら良かったのに」
アズファイリーは空いたもう一方の手で、セイムスの袖を掴んでいた。

「そしたら、あたしはあなたと同じことをしてたと思うわ」

言わずにはいられなかった。フロリアだって同じ気持ちのはずだ。セイムスは一時驚いた顔を見せたが、すぐに陰ってしまった。

「ありがとう。でも、フロリアには無理だよ。その気持ちだけで十

分

セイムスはアズファイリーの手を毛布の中に戻し、寝かせようとしてきた。

「無理じゃ、ないわ」

強気な言葉を返すと、セイムスは困ったような顔をした。それから、顔を近づけてきた。何をされるのか想像はつくが、慣れるはずない。黙したまま口付けが終わるのを待った。

「君に聖獣殺しなんて、させられないよ」
額から唇が離れる間際の、告白だった。

慌てて瞼を開いたが、蠟燭を吹き消されてしまった。視界が闇に包まれる寸前、セイムスの首元に光る鍵を見た。

現実味の無い告白は、アズファイリーの睡魔を根こそぎ奪った。

つまり、あれから寝ていない。ずっとセイムスの息遣いや衣擦れの音を背中で感じながら、ひたすら目を閉じていただけ。拷問を経験したことはないが、それに近い境地だ。

カーテンを引き開ける音で、待ちわびた朝の訪れに気付いた。セイムスの足音に耳を澄ませ、部屋を出て行ったと確信してから瞼を上げた。

聖獣とは一体、何だ。妖精を糧にしなければ維持できない世界とは。

書齋に積み上がった本や紙束は、フロリアを救う手だてを必死に探した結果だろう。その答えが、聖獣殺し。だが、フロリアは取り決め通り聖獣の贄となり、セイムスは自害した。そして自らの意思で、魂をこの異空間に残し、過去の時間を延々と過ごしている。

シューヴァーンから聞いた話を繋ぎ合わせても、まだ穴だらけな気がした。

眠たくなっても夢の中へ潜らなければ、と思ったとき。

ゴゴゴゴゴッ

地鳴りの後に耳をつんざくほどの轟音が上がり、屋敷全体が激しく揺れた。

「な、な、何？ 雷？ 地震？」

今度は痛いほどの静寂が訪れた。怖々と窓へ目をやるが、外は快晴そのもの。

ふと、異常事態が起きたというのにセイムスが飛んでこないことに疑問をもった。胸がざわつく。アズフィリーは部屋を出て、廊下を駆け抜けた。何度も名前を呼び回廊へ出ると、一階へ続く階段の手前で倒れたセイムスを発見した。

走り寄り、起き上がろうとするセイムスの背中を支える。

「大丈夫、だ。それより鍵が、どこか転がってないか？」

アズフィリーは慌てて視線を巡らせ、少し下がった階段に鍵を見つけた。

「くそつ、壊される！ 一体誰だ、ここを破ろうとしているのは」アズフィリーは階段を下りて鍵を手にした。背中に浴びたセイムスの怒声に、氷をぶつけられた気がした。

中途半端な同情は捨ててくれ。

シューヴァーンの声が、鮮烈に甦った。

救うために来たはずなのに、より傷つけている気がして仕方がない。

アズフィリーは鍵を握る手を後ろへ回し、一歩ずつ階段を上がる。

「もう終わらせよう、セイムスさん。あたしは、フロリアさんじゃないの」

アズフィリーだと、自分の生い立ちを聞かせた。セイムスは置き去りにされた幼子のような顔になったが、構わず続けた。その間も地鳴りが続き、雷鳴に似た音が轟く。連動するように苦しみだしたセイムスから白い光が立ち上った。

「確かに、君はフロリアじゃないようだ」

腕をかき抱きながら、セイルスがはつきりとそう言った。

「ヴァーンの仕業か。やってくれる。おかげで正気に戻ってしまっただよ」

セイルスとアズフィリーの間に、亀裂が走った。しかし、亀裂と思ったそれは、直線状に走った光の筋だった。瞠目している内に、どんだん不思議な現象は加速する。何と、床からよきによきと壁が生えてきたのだ。否、壁ではない。墨色をした重厚感ある扉だった。ぷかぷかと空に浮かんでいるが、扉にしか見えない。アズフィリーを仰天させたのはそれだけではなかった。奇妙な扉が出現すると共に、人の影も床から生えてきていたのだ。その後姿を目にしただけで、胸が一杯になった。

「伯父上、お迎えに上がりました」

扉の横に立つ影は、芝居がかったように頭を下げた。名前を呼ぼうとして、喉が詰まる。

「アズ」

自分の名前を愛しく聞こえたのは初めてだ。身体の内まで力が行き渡るのを感じた。

「よく頑張ったね。上出来だよ」

伸びてきた手を掴まえ、確かなぬくもりを感じた。これは夢ではない。自分でも驚きだが、衝動的にシューヴァーンの腕に巻きつき、込み上げてきた涙を抑えた。

「ごめん。辛い思いをさせたね。だから、伯父上、もう終わりにしましょう」

「ヴァーン？ シューヴァーンなのか。驚いたな、僕にそっくりだ」「ええ、同じ感想です。どおりで私を見る身内の目がくすぐったいわけだ」

アズフィリーはシューヴァーンの腕から離れ、恐々とセイルスへ顔を向けてみた。すると、こちらを見ていたようで、まともに視線がぶつかった。

「なるほど。それが君の本当の姿なんだね」

え？ と、自身の姿を見下ろしてみると、髪が小麦色に戻っていた。

「ご、ごめんなさい」

両手で髪を撫で付け、俯きながら謝っていた。

「謝る必要はない。伯父上、フロリア嬢はヴァルハヌスと一つになる直前、魂の欠片を父の元へ寄こしたのです。伯父上のことを憂い、救済の芽を残したかったのでしょうか」

セიმスは黙り込んでしまった。

「本来なら魂の采配に私情を挟んではいけない所を、父がシュヴァルツ様に頼み込んだのです。器に選ばれたアズには、本当に申し訳ないことをした」

シューヴァーンの横顔が苦痛に歪んでいた。

居心地の悪い沈黙に、アズフィリーは二人を見比べた。口を開いたのはセიმスだった。

「アズフィリーさん、僕らカルデイナ家が妖精を祖に持つ一族だと知っているかい？」

アズフィリーが肯定すると、次に妖精とは何かと訊ねてきた。誰もが知る説明をした。

「ヴァーン、巻き込んだからには真相を教えないと卑怯だよ」

ここで話を振られたシューヴァーンは、深い溜息と共に声を出した。

「アズ、妖精とは人と神とが交わって生まれた半神半人のことを指している。我が、カルデイナ家の祖は、冥界を統べる王シュヴァルツと時の女神ルージュより慈悲を賜った」

「えっと、だから、不思議な力を持っているってこと？」

シューヴァーンが振り向いて頷くと、セიმスが話を引き継ぐ。

「神はね、人と交わると力の一部を失うんだよ。神の力を持った妖精は初め、神々の忠実なる臣下だった。人よりも敬虔なね。となる」と、神々の寵愛が妖精へ向くのも自然だろう？ 増えていく妖精。消えていく神々の力。その結果、おかしい構図が出来上がるよね」

分かる？ と、セイムスの目が問うてくる。

「臣下の方が、王様より力を持つちゃうってことだから」

慎重に言葉を繋げていたアズファイリーから、シューヴァーンが続く。

「神に成り代わろうと考えたんだ。どちらが神なのか分からない奇妙な状況が出来上がり、愚かにも我らが祖は謀反を企てた。三大妖精を筆頭に。だが」

「だが、腐っても神は神。初めは天界へ追い返せばいいと思ったけれど上手くいかない。どんな方法で殺しても、死なないからね。そこで、妖精に与する神が一人、名乗りを上げた。カルディナ家と縁深い、冥王シューバルツだ」

アズファイリーは二人が語っていく内容を、頭の中で必死にまとめる。

同族を裏切ったシューバルツは、神を完全に殺すことは不可能だが、永久に封じることなら出来ると言った。まず、天界と地上を繋ぐ扉でもある七色の空を、神の血によって青く染めなくてはいけない。そして、血の抜けた身体を冥界の獣ヴァルハヌスに喰わせる。こうすることで、肉体の再生も魂の復活も完全に押さえられる。ただし、定期的に腹を空かすヴァルハヌスに食事をさせる、という欠点があった。もともと大罪を犯した神族を閉じ込める役割を担っていたので、腹を空かせば神族から一人選出されてきたのだ。

つまり、今後選出されるのは妖精となるが、その覚悟はあるか？ とシューバルツは訊ねた。ただの人では意味がない。神に近い妖精でなければ獣の腹は膨れない。膨れなければ獣が弱り、死に至る。牢獄の崩壊と同意語だった。

それでも神の追放を願うのなら、ヴァルハヌスを地上へ放とう。そして今、その獣は妖精を駆逐した聖獣として人々に崇められている。

「妖精の存在を悪としたのは、今の君主が神殺しの大罪人であることを隠したかったからじゃないのかな。都合が良いよね」

「伯父上」

シューヴァーンはセймスを咎めるように呼んだ。

「確かに我ら祖がやったことは愚かしいことだったかもしれませんが、けれどその時、実際その場に居なかつた我々が判断することではない。残された私達が懺悔するならやれることは、三家に課せられた永久の使命を果たすことしかありません。今更世界を神に返してどうなります？　今を生きる人のため、現実を見据えなければなりません」

セймスは太陽と対面するように、シューヴァーンを見つめた。それから苦笑した。

「弟と同じことを言う。親子なんだね。顔は僕にそっくりなのになあ」

フロリアに向ける笑顔を、セймスがようやく浮かべてくれた。

「僕が聖獣を殺しに宮殿へ行ったときにね、君の父上が説得した言葉とまるで一緒だよ。嫌だな。思い出しちゃった。あの時……首をはねられても当然の僕を庇った唯一の弟。そして僕の愛するフロリアの最後」

セймスは俯き、肩を震わせた。

「僕は、一人で何をしてたんだろう。足掻いても結局未来は変えられず、ただフロリアを余計に悲しませただけだった。弟の親愛も裏切ってしまった。ジタバタ動き回っていただけで、誰も助けていない。何もかもその逆だ。不幸の連鎖を招いただけだった」

何をしていたんだろう、とまた囁いた。

「ちょ、ちよつと待ってよ」

セймスの足元に涙の粒が四散した。アズファイリーは二人の間に割って入った。

「別世界な話だったけど、自分なりに解釈できたと思うわ。一応ね。で、言わせてもらおう」

左右に同じ顔の男が、目も口も丸めて同じ表情をしていた。

「世界へ視野を広げて物事を考えたことなんかないけど、シューヴ

アーンがたぶん、現実的で、正しい意見なんだろうなと思う。王様とか上に立つ人はそういうもんなんですよ。でも、あたしはセイムスさんの方が親近感が湧くの。それに、素敵だなんて思う」

「ア、アズ、まさか、やっぱり伯父上に」

「じゃなくて、フロリアさんの気持ちになって考えると、ってこと。あたしも一応女だし。ここで重要なのはフロリアさんの気持ちよ。同じ女として意見するの」

少しばかり照れたので、天井を見つめてから叫んだ。

「フロリアさんとはとっても幸せだった！ 絶対の絶対に！」

今度は足元へ視線を落とし、柄にもなくもじもじする。

「だってね、そこまでしてくれる人がいたってことだけで奇跡みたいにすごいことだもの。幸せよ。もちろん可哀想だよ。けど正直、羨ましいなと思う。ついでに怖い気もするけど」

「怖い？」

セイムスが静かに復唱した。アズフィリーはなぜかこのとき、シューヴァーンの顔が見たくはないと思った。背中を向け、セイムスの方をチラリと見上げた。

「そこまで好きな人が出来たら、ちょっと怖い」

自分がフロリアだったら、残していく人が心配でたまらない。

「もう手遅れかもしれないね」

セイムスの言葉にアズフィリーは目を剥く。そして眉を曇らせ首を傾げる。

「ヴァーン、この子可愛いね」

快活な笑い声を上げるセイムスとは逆に、シューヴァーンは低く呻った。

「さてと、そろそろ行こうかな。扉を開けて、ヴァーン」

シューヴァーンは文句を言いながら、人差し指で空を切った。後ろに浮かんでいた扉が開いたので、アズフィリーは何気なく覗こうとした。

「アズ、危ないよ。冥界へ繋がってるから落ちたら大変だ」

「どうなるの？」

後ずさつて聞くと、隣に立ったセイムスがにっこり笑った。

「僕と死ぬかい？」

「ははは。伯父上、なかなか冗談がお上手ですね」

すかさず嫌みを返すシューヴァーンは念のためか、アズフィリーを背中隠した。

「ヴァーン」

声の響きが特別だった。表情を引き締めるシューヴァーンを下から盗み見た。

「ありがとう」

シューヴァーンは泣いているかと思っただが、瞳が光っているだけだった。

セイムスのことをどれほど慕っているのかは、行動と表情が証明している。

「ヴァーン、ちょっとアズフィリーさんと内緒の話していい？」

「な、内緒の話、ですか。どういった内容でしょうか」

おそらく心の中で同じ突っ込みをしたアズフィリーとセイムスは目を合せて苦笑した。

アズフィリーは自らセイムスの傍へ寄り、壁際まで連れて行かれた。

「知らずにいるべきか、知っておくべきか、どちらが幸せか僕には分からない。けど、僕としては事前に知っておきかったから、話しておきたい」

真剣な眼差しだったので、アズフィリーは真摯に耳を傾けた。

「聖獣への贄はだいたい百年ごとに繰り返し返されているんだ。選ぶのは、聖獣自身だ。どういった基準で決めているのかは知らないが、平等に三家から選ばれている。ラディツシュ王家、ヴァルハーツ家、カルディナ家の順にね。歴代の流れを見れば、次はカルディナ家が選ばれる可能性が非常に高い」

セイムスの顔を通して、別の人を思い浮かべた。

「誰が選ばれるかは分からない。一つの可能性だ。けど、そうなら
ないことを切に願おう」

もたらされた告白に、アズフィリーは打ちのめされた。容易く想
像できたはずなのに。

「アズ？ アズ、何言われたの？」

アズフィリーは肩を揺すられて、我に返った。目の前にシューヴ
アーンがいた。

「アズフィリー、堕ちる瞬間がいつだったかって僕に聞いたよね？
覚えてる？」

セイムスは背中を向け、開け放たれた扉へ踏み出していた。扉の
向こうは真つ暗だった。

「覚えてる！」

「良かった。これで少しはヴァーンに御礼ができたかな」

軽く会釈をして、扉の向こうへ完全に消えた。またすぐに会えそ
うな別れ方だった。

目の前から扉も消え去っていた。それでもまだ、アズフィリーの
視線は止まったまま。

「さてと、帰ろうか。アズ」

シューヴァーンが横に指を切ると、再び光の筋が床に走り、今度
は黄色の扉が出現した。

「カルディナ家の領土に繋がってるから。すぐに帰れるよ。身体を
休めないよ」

何も反応を示さないアズフィリーを、シューヴァーンは怪訝そう
に覗き込んできた。

「伯父上に何を吹き込まれたの？ 堕ちる瞬間がどうって？ 何に
堕ちるの？」

セイムスが恋だと自覚したのは、フロリアを失うと分かった瞬間
だった。

アズフィリーはセイムスと同じ、金の瞳を見つめて急に頬を染め
た。

「え、アズ？ 待ってよ、アズ！」

アズフィリーは追いつかれないように黄色の扉へ入り、光の中を走り続けた。

終章

カルディナ家に戻って、一週間が過ぎようとしていた。

アズフィリーは窓越しに見える満月をポケットと眺めてから、のろのろと寝台へ潜る。

居心地が悪かったはずなのに、そんなことを気にする余裕すらなくなっていた。セймスと別れてから、ずっとシューヴァーンのことを考えている。とても本人には言えない。そのシューヴァーンは、王都にいる両親へ事の顛末を報告しに行っている。アズフィリーにとっても一応親に当るので、連れてってくれるものと思ったが、休んでいるよう言われた。まだ一度も会っていないなんて、変な話だ。(ひょっとしてセймスさんのことが終わったら孤児院に返すつもりだったのかしら)

ふとそんなことを思って、出発前に話したご褒美を思い出した。

(ああ、すっかり忘れていたのに。余計なこと思い出しちゃった)

ただでさえ悶々としているのに。これ以上は抱えきれない。毛布を頭まで被った時。

「アズ、起きてる?」

アズフィリーは驚くべき速さで起き上がった。月明かりに満たされた部屋に、太陽の輝きを宿した男がいた。名前を叫びかけて、遮られる。

「静かに。実は内緒で帰ってきたんだ。本当はさっきまで実家にいたからさ」

シューヴァーンは親指を立てて、部屋の隅に浮かぶ黄色の扉を示した。

「妖精の力は秘匿されてるからね。安易に使っちゃ駄目なんだけど来ちゃった」

ふ、ふーん、と気のない返事をしてしまう自分って本当に可愛くない。

「あれれ？ お兄様に会いたくなかった？ 呼ばれた気がしたのに」
アズファイリーは焦りを隠すように毛布を抱え込んだ。すると、そつと溜息が聞こえた。

「アズ、いい加減教えてくれないかな。あの時、伯父上に何言われたの？ 冥界までちよつと行って問い詰めたんだけど頑として言わないんだよ。全く大人げない」

「え？ い、今何て？ 冥界にちよつと？」

「私はカルディナ家の次期当主だから、わけないさ」

散歩に行つてくるみたいなきげさで冥界へ行こうとも、驚かないぞ。逆にそれぐらい出来て当たり前と思つていないと身が持たない。「それより、そろそろ観念して教えて欲しいな。手が届くのに、何も出来ないのは辛い」

セイムスのことを思い出しているのだろうか。そこを突かれては、弱い。

「セイムスさんが、その、贄のことで。次はカルディナ家から選ばれるって教えられて」

「まさか私だと、吹き込まれた？」

毛布をぎゅつと握つて、弱く頷いた。顔を見るのが怖い。息づかいを聞くだけで精一杯。

「やれやれ、余計なことを言ってくれたな。あの人は」

否定してくれることを多少期待していた。現実、少女が辿った道だというのに。

「アズ、それで私のことを心配してくれていたんだね。ありがとう」
頷くことも、頭を振ることもできなかった。

「でもね、気にしなくて良いよ。例えそうなたとしても、まだ九十年近く先の話だし」

妖精は人より長命らしい。だから、九十年経つてもシューヴァーンは生きているが、アズファイリーはとつとくに冥界へ逝つてるだろう。

だからといって気が楽になる話じゃない。

「それに確証はないけど。歴史を見ても長男が、つまり当主が選ばれた例はないから」

肩の力が抜けるのを感じた。身体が縮んだ気さえする。

「本当？」

冷静に考えれば、この返事はかなり失礼だろう。シューヴァーン以外なら構わないみたいないやうだ。本来なら長男が担うべき責務だと、彼なら言いかねない気がした。

「ああ、本当だよ」

それなのに笑ってくれた。アズファイリーはたまらず膝頭に顔を埋め、謝った。

「どうして謝るの？」

「だって、嫌な言い方だったもの」

涙が頬を伝ったのですぐに毛布でこすった。

「そんなことないよ。私は嬉しいよ。本当にありがとう」

頭を撫でる手を感じ、余計に涙が止まらなくなった。これでは顔が上げられない。

「それにしても伯父上だって知ってるはずなのに。余計なことを言つて。迷惑な人だ」

いよいよ認めなくてはならない。セイムスさんが残していった土産を腐らせては駄目だ。

「気付かせたかったんだと思うの」

毛布から顔を離し、手の甲で改めて涙をぬぐった。シューヴァーンが訊ねるより早く。

「あたしがあなたのことを好きってことを」

ちゃんと目を合せて告白できた。自分へ拍手をしたい。

「アズ、ごめん。もう一度言つて」

シューヴァーンは見たことのない無防備な顔をさらしていた。その様がおかしくて。

「好きっていったの！」

一気に視界が暗くなったのは、シューヴァーンの胸に顔を押しつけられたから。

「なら、ならもう、孤児院には戻らないよね？ あのご褒美はなしだよ？」

アズファイリーは腕の中で頷いた。

「良かった。聞くのが怖くてたまらなかつたんだよ」

こうしていると胸に燻っていたものが消えていくようだ。幸せでたまらない。

「アズ、ずっと私の妹でいてくれるね？」

おそらく出会った時から兄として見てはいなかった。さらに自分の気持ちを知った今では、正直難しい要求だ。でも、これ以上を望もうとするのは傲慢というもの。

「うん。ヴァーンお兄様」

アズファイリーが背中に手を回すと、羽根のような口付けが額と脛に降ってきた。

この想いが恋だと気付いたのは、あくまでアズファイリー。しかし。

この後。

妹への異常な愛が、ただ事ではないと周囲の人間は誰もが気付く。そして、当の本人が自覚するのは、そう遠くない未来にやってくる。

一人のお節介な男によって。

その男の名は、セイムス。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家なるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0043w/>

迷者セイムス

2011年8月31日03時26分発行